

歓迎の辞

北西憲二

日本森田療法学会理事長

日本女子大学・森田療法研究所所長

第7回国際森田療法学会がPeg LeVine博士 (Monash Asia Institute, Monash University, Melbourne) のもとで2010年3月にメルボルンで開催されることになりました。第6回国際森田療法学会は石山一舟博士 (Department of Educational and Counseling Psychology, University of British Columbia) が2007年8月にバンクーバー、カナダで開催しました。そこでの大会テーマは「Future of Morita Therapy: Multidimensional Understanding and Application of Morita Therapy」で、石山博士はカナダでの森田療法の実践をふまえて、森田療法の多面性と西欧の精神療法との共通点を指摘し、異文化での適応について述べました。

Peg LeVine博士が掲げたこの大会テーマは“Beyond Borders: Morita Therapy for Uncertain Times”です。LeVine博士は森田療法がさまざまなボーダーを超えた普遍的な精神療法だと考えています。私も同意見です。私が理解する“Beyond Borders”という意味は、まず森田療法は文化を越えた普遍性があるということです。森田療法が日本のみで行われている特殊な精神療法ではない、ということです。さらにその対象も広く不安障害、うつ病、さらにはさまざまな私たちが生きるに当たっての苦悩、東洋ではその苦悩の代表を、生老病死といいますが、の解決に有効であることが見いだされるようになりました。Peg LeVine博士は、トラウマの犠牲者にたいして入院森田療法をメルボルンで行っており、注目すべき成果を上げています。ここではすでに森田療法がボーダーを超え、新しい可能性を示しています。またPeg LeVine博士は治療的環境や自然との共生を重視しているようにも思われます。

最近の西欧の精神療法のトピックとして、「受容」という概念が注目されています。いわば伝統的な不安、抑うつ、苦悩の「コントロール」することから「受容」へのパラダイム転換を主張するものです。例えば、“Acceptance and Commitment Therapy”、“Dialectical Behavior Therapy”、“Mindfulness-based Cognitive Therapy”などがこれらの系列の属するものとして理解できます。しかしこの“受容”に関して、“あるがまま”という言葉が示すように90年前から森田療法では治療実践の中心的概念でした。そして森田療法における「受容モデル」に基づく人間理解とは、東洋の人間理解、つまり原始仏教、老荘思想、禅、浄土真宗やそこから導き出された「自然との共生」、「心身一元論」とも深く関連します。

それゆえ森田療法ではクライアントとの対話のみならず、治療環境や日常生活での行為を重視し、内的な変化と行動の変化は密接に関係していると考えられるのです。これはPeg LeVine博士の治療実践の基本になっているものと考えられます。

この国際会議で、西欧と東洋との出会いと対話を通して、ボーダーを超えた森田療法の新しい可能性を見だし、それを世界に発信することが期待されます。

最後に第7回国際森田療法学会を引き受けてくださったPeg LeVine博士、会議をサポートしていただいているConference Working Committees のメンバーの方々とMonash Asia Instituteのディレクター、Marika Vicziany教授に心からの感謝の意を捧げます。

第7回国際森田療法学会が成功することを祈念して私の挨拶を終わりといたします。